

# 星野学園小学校新聞

星野学園小学校  
 埼玉県川越市上寺山 216-1  
 〒350-0826 Tel.049(227)5588  
 星野学園小学校 Web  
[www.hoshinogakuen.ed.jp/hes/](http://www.hoshinogakuen.ed.jp/hes/)

## 異国から持ち帰ったもの

八月二十七日(月)の成田国際空港、一週間という長いようで短かったニュージーランドへの修学旅行も、いよいよ終わりを迎えるようとしている。「ただいま」という元気な声の先には、我が子の笑顔を見て、安堵の笑みを浮かべる保護者の姿が見られた。

一週間程前の二十一日は、晴天の真夏日だった。多くの保護者に見送られる中、五年生七十二名は、一路バスで成田国際空港へ。空港では、JTBの代表の方に見送られながら、搭乗ゲートへと向かって行った。初めての飛行機という児童も多く、悪戦苦闘しながらも、何とか全員搭乗し、機内食を食べたり、東の間の休息を取る等したりして、ニュージーランドへ向かった。現地、オークランド空港の天気は曇り。気温は一桁。出発した日本とは、正反対であった。バスに乗り込むと雨が



連日良い天気でした！(スカイタワーより)

できたようだ。博物館のあとは、ニュージーランドでの初めての昼食、スカイタワーホテルでのピュッフェである。美味しい食事に、児童たちの緊張も少し解け、楽しそうな笑顔が多く見られるようになった。

降り出し、先行きの不安を口にする子もいたようであったが、その表情は笑顔に満ちていた。ニュージーランド一日目は、オークランド博物館からスタートした。ニュージーランドの歴史や文化、動植物など、これから実体験するニュージーランドの概要を学んだ。事前学習で学んだこともたくさんあったが、実際に目にする、座学とは違う感動を児童たちは味わうことが

間を思い思いに過ごしていた。国境という垣根を越えて仲良く過ごす姿に、児童たちがこれから作り上げていくであろう、明るい未来の姿が重なるようであった。現地校との交流後は、ロトルアに移動し、夕食ではマオリ族の伝統料理である「ハンギ」を食べ、マオリコンサートを観賞し、一緒にハカやポイダンスを踊るなどして楽しい夜を過ごした。

三日目は、「Te Pahi」でマオリ族の生活の様子や間欠泉を見て回った。「Te Pahi」の目玉の一つがニュージーランドの国鳥であるキーウィである。夜行性で臆病な性格のため、なかなか見ることが出来ない鳥であるが、今回は幸運にも活動しているキーウィを複数見ることができ、児童は心の中で大喜びしていたようであった。その後は、アグロドームで羊の毛狩りショーとシープ

ドクショーを見学し、近くのスカイラインのレストランで昼食。そして、いよいよ二泊三日のファームステイ、スタート。ミーティングポイントでは、初めて会うホストファミリーに、緊張気味の児童も多かったが、自己紹介などで少しずつ緊張も和らいでいったようだった。教員たちとの別れ際には、笑顔で過ぎ去る児童も多かった。翌日、教員たちが視察に行った二つのファームでは、それぞれのホストファミリーのおもてなしを受け、とても楽しそうな笑顔で過ごす児童ばかりだった。ファームステイの最終日には、ホストファミリーとの別れを惜しんで涙する児童もいた。その後の話を聞くと、楽しかった体験だけではなく、思いが上手く伝えられなかったり、逆に言われたことが理解しきれなかったりと、困ったこともあったようだった。しかし、大人に頼ることなく、自分たちで協力して乗り越えたことに達成感を感じた児童もいたようで、ファームステイを終えて一回りも二回りも成長したことを実感できたようであった。

六日目は、ワイトモ鍾乳洞を見学した。この目玉は「土ボタル」である。事前にガイドの方から説明があり、実際にみると、洞窟内は土ボタルの放つ光によって満天の星空が広がっており、児童たちも心の中で歓声を上げていた。ワイトモ鍾乳洞の見学後は、ロイズガーデンで昼食を食べ、オークランドに戻った。オークランドでは、それぞれの思いを巡らせながら、一時間という限られた時間の中でお土産を選ぶ児童の表情からも、充実した一週間であった事が窺える。最終日は、日の出前に空港へ。時計を見ると、日本時間で午前二時半にホテルを出発。十一時間のフライトの中、異国での緊張感と一週間の疲れが表情に見られる児童も多かったが、ホテルを出発して十六時間後、その日一番の笑顔が成田国際空港の到着ロビーに溢れていた。

結果として幸運にも、天候に恵まれたニュージーランドへの修学旅行。この一週間を通して、児童たちは多くのことを学び、成長して日本に戻ってきた。異国の人との交流を通して、自国とは異なる文化に触れ、その違いを感じ、それぞれを結びつけるコミュニケーションの大切さを知ったようだ。このような経験や学びは、彼らがニュージーランドから持ち帰ったかけがえのない財産であるに違いない。小学校生活最大の行事である修学旅行は、それまでの学校生活・宿泊行事の総まとめである。今回の経験がこれ以降の長い人生にどのようなプラスになるかが、とても楽しみである。



ホストファミリーと、ハイチーズ！

中国との学校交流  
 本校では、七月六日(金)と九日(月)に、中国の「東北師範大学附属小学校」の子どもたちを迎え、高学年を中心とした交流を行った。児童は中国の子どもたちを交えて四人程度の班となり、その班を中心として過ごした。始めは緊張している児童もいたが、これまで学んだ英語を駆使し、コミュニケーションを図っていくと、子どもたちはあつとつと間に打ち解けていった。授業では、児童が内容を説明する場面や、中国の児童の発言に驚かされる場面もあった。休み時間になると、一緒にサッカーをする子や、学校探検をする子が見受けられた。今回の交流を通して、児童たちは人とのコミュニケーションに、大きな自信を得ることができた。「言葉だけでなく、身振り手振りを使って、相手に伝えようとすれば、誰でも会話ができる。」という児童の言葉が印象的だった。子どもたちには世界と向き合い、世界で活躍できるように人間に育ってほしい。(森本)

# 音楽芸術鑑賞会

七月十一日(水)、星野

記念講堂ハーモニーホールにて、第五回となる芸術鑑賞会を開催した。情操教育の一環として、子どもたちに一流のものに触れてもらいたいとの思いから、毎年、プロの方をお招きして、音楽やバレエ、演劇などを講演していただいていた。今回は、世界的にご活躍されている雅楽師・東儀秀樹さんをゲストにお迎えした。代々、東儀家に受け継がれているという楽器の数々をお持ちくださり、多彩な演奏を披露してくださいました。

第一部は、演奏を交えた雅楽解説と知らされていた子どもたち。舞台上に登場する東儀さんを心待ちにしていた。しかし、どこからともなく、笙(しょう)の音が聞こえてくる。なんと、東儀さんは客席の扉から、演奏しながら登場されたのだ。子どもたちも教員も、そして客席の保護者の皆さんもびっくり。東儀さんは宮中での演奏等着用する伝統的な衣装に身を包んでいた。その出で立ちと、笙の音色から、ハーモニーホールが千年もの



客席から登場する東儀秀樹さん

昔にタイムスリップしたように感じられた。子どもたちは驚きながらも、目をキラキラさせて、その音色に耳を傾け、わくわくしながら、東儀さんが舞台上上がっていくのを見守った。登壇されると、東儀さんは静かに自己紹介をされ、楽器「笙」について解説してくださいました。初めて見る楽器に、みんな興味津々。笙は息を吹いて音を出せるだけでなく、息を吸い込む事で音も鳴り、まるで息継ぎをしていないかのよう音が鳴らし続けることができた。その形は鳳凰が翼を立てている姿とされ、古代からその音色は「天から差し込む光」を表すとされている



響き渡る笙の音色

という。さらに「笙」と並んで、雅楽の中心的な役割を担う管楽器「篳篥(しちりき)」と「龍笛(りゅうてき)」についても解説してくださいました。「篳篥」は息を吹き入れて音を出す縦笛だ。男性が普通に出来る声の範囲とほぼ同じ音域のため、古代から「人の声」つまり「地上の音」を表す楽器と言われている。最後に「龍笛」。この楽器は文字通り、天と地の間を行き交う「龍の鳴き声」を表している。そのため、この三つの楽器を用いて演奏することで、「天」「地」「空」を合わせる、つまり音楽表現がそのまま宇宙を創ることだと、古来より考えられているのである。

このような壮大なお話や、澄み渡るような音色に、子どもたちもすっかり夢中だ。そして、東儀さんがワインシャツ姿に衣装を替え、舞台が転換されると第二部は、耳なじみのあいなポップスや歌謡曲を演奏してくださいました。バツクで流れる演奏も全て東儀さんご自身がアレンジし、ドラムやベース、キーボードといった楽器もご自分で演奏したと紹介してくださいました。東儀さんの多才さに、会場中が感嘆の声を漏らした。東儀さんは伝統的な雅楽の演奏を守り続けているだけでなく、雅楽を多くの人々に触れてもらうた



東儀さんと児童全員で記念撮影♪



「笙」にチャレンジ!

め、様々なジャンルの音楽を雅楽器で演奏する活動もされている。第二部では、楽器体験コーナーも設けられた。事前に予定されていた児童だけでなく、「吹いてみたい人!」と、子どもたちに参加を募るサプライズも。子どもたちは大喜び。我先にと身を乗り出すように手を挙げた。その光景を見た東儀さんは、「星野学園小学校の皆さん、恐れずにチャレンジしようとする姿勢が素晴らしい」と、子どもたちに声をかけてくださいました。「初めてのことは、いつでも不安や緊張がつきものだが、やってみなければ、何も分からない。チャレンジしようとするその気持ちを忘れないで」と。登壇した一年生の女子児童は、は戸惑いながらも、丁寧な指導の下、立派に音を出した。六年生の男子児童は、東



皆、笑顔で手拍子!



みんなで寝るぞー!

儀さんとのセッションも実現。会場からの羨望の眼差しを受けていた。コンサート最後の、AKB48の「恋するフオーチュナーキック」。雅楽器でこんな曲も演奏できるんだ!と驚かされながら、よく知るあの振付を皆で踊り、笑顔の終幕。閉会後、ご好意で会場の全員で集合写真を撮ってくださり、さらに、楽器のプレゼントまで!星野学園小学校に「篳篥」を寄贈してくださいました。子どもたちは、「篳篥」に触れる楽しさも増え、雅楽という素敵な世界の扉を開くことができました。(海野)

## 一年夏の学校

七月四日(水)と五日(木)に一年生にとって初めての宿泊行事である「夏の学校」が開催された。初めての宿泊行事で寂しがってしまう子はいないかと、校門で登校する様子を見守ったが、いつも通りの笑顔で登校する子どもたちの姿を見て安心することができた。

一日目は英語の授業を担当しているパットン先生と一緒に大きなケーキを食べた。パットン先生のギター演奏に合わせて「ハッピーバースデー」を歌い、心を一つにして「夏の学校」が始まった。その後、英語部とESS部の高校生、顧問の先生と一緒に、英語を使ったゲームを行った。楽しいゲームの時間はあっという間に過ぎ「もっとやりたかったな」小学校にまた遊びにきてほしい」と、高校生との貴重な交流の時間を存分に楽しんでいる様子だった。夕方からは川越市の児童センター「こどもの城」へ徒歩で向かい「プラネタリウム鑑賞」を楽しんだ。道中、事故に合わないよう走り守っていききたい。

二日目の朝、自分の布団を離れ、お友達との仲良く眠っている微笑ましい姿を見て、教員たちにも笑顔があふれた。全員が起床し、体育館で体操を行い、中学校と高校の校舎を探検した。「机大きいね。」「迷子になりそう。」「普段はなかなか入れない教室の数々を興味深そうに見ながら、小学校へ戻ってきた。帰りの会の前には使った布団を自分たちでたたみ、体育館やランチルームを協力して掃除した。二日間の「夏の学校」を一年生全員で楽しく過ごし、毎日通っている学校の新しい一面を知り、今まで以上に学校を好きになったのではないかとと思う。入学式の時よりも自分ができることが増え、日々成長していく一年生を、今後も見守っていききたい。(大橋)